

目次

凡例	ix
序章 狂言台本の研究とその刊行状況・本書の底本	1
第I部 言語資料としての狂言台本	
第一章 大蔵虎明本における狂言詞章の伝承と改訂	
—— 本文注記の分析から ——	13
一 はじめに	13
二 虎明本における本文注記の分析	14
1 「末広がり」に関して	14
2 「宝の槌」に関して	17
3 「鍋八撥」に関して	19

4	「入間川」に関して	21
5	「鬼瓦」に関して	25
6	「船渡聲」に関して	27
7	「鶏泣」 <small>けいりゅう</small> に関して	29
8	「箕被」に関して	31
9	「栗田口」に関して	33
10	「萩大名」に関して	35
11	「瓜盗人」に関して	37
12	「金津の地藏」に関して	38
三	おわりに	39

第二章	天理本『狂言六義』の用語	43
一	はじめに	43
二	天理本『狂言六義』の用語の特徴	43
三	「たて物」再考	45
四	はんじゃ	48
第三章	鷺流享保教本の用語	53

一	はじめに	53
二	問題例の指摘	53
三	注目すべき用語	56
1	ゐきやく（違格・違却）	57
2	ウツケウナ	58
3	だうけじん（道化人・道戯人）	59
4	かまけ（蚊負け）	60
5	すぐぬき（直抜き）	61
6	ずらめく	61
7	小耳のせせ（完骨）	62
8	ちかた（地方）	63
9	てわき（手脇）	64
10	とびこえ・とびこし（飛越）	65
11	にげがまへ（逃げ構へ）	66
12	やまこし（山越）	67
13	〔擬声擬態語〕	68
四	おわりに	70

第四章 和泉流雲形本『狂言六議』の本文の性格について

——筆録時期と言語事象——

一	はじめに	75
二	雲形本の筆録者と成立時期	75
三	雲形本の言語事象の整理	79
四	『秘傳聞書』における言語事象	87
五	おわりに	90

第五章 和泉流雲形本と古典文庫本の本文比較

第一節 せりふに関して

一	はじめに	93
二	雲形本と古典文庫本の関係について	94
三	雲形本と古典文庫本との校異	97
三・一	語句・文などの脱落	98
三・二	さまざまな異同	101
第二節	ト書き・注記に関して	111
一	はじめに	111

第六章 南大路家旧蔵和泉流狂言台本とその翻刻本文について

——言語資料としての『狂言集成』と『狂言三百番集』——

二	雲形本と古典文庫本の関係について	111
三	雲形本と古典文庫本との校異	112
三・一	本文の誤認とみられるもの	112
三・二	語句・文などの異同	115
四	おわりに	123
一	はじめに	125
二	『集成』と『三百番集』の底本	126
三	『集成』『三百番集』の異同と南大路家旧蔵本との関係	132
三・一	「茶壺」の場合	133
三・二	「悪太郎」の場合	139
三・三	「川上」の場合	146
三・四	その他注意すべき異同	148
1	省略箇所	149
2	漢語の表記	150
3	偶然確定条件「タラバ」の使用	152
四	おわりに	154

第七章 和泉流三百番集本におけるシャル・サシャル敬語

一 はじめに	159
二 三百番集本におけるシャル・サシャル	159
三 版本狂言記その他との比較	168
四 狂言台本における近世語的要素	173
五 おわりに	176

第八章 言語資料としての天理図書館蔵『狂言大外』『狂言新』

一 はじめに	181
二 『狂言大外・新』の本文	181
三 『狂言三百番集』所収曲について	183
四 『狂言大外・新』における言語事象	189

第九章 天理図書館蔵『狂言大外』におけるシャル・サシャル敬語

一 はじめに	195
--------	-----

二	『狂言大外・新』における(サ)シヤルと(サ)セラル	195
三	(サ)シヤルに関連する語	205
四	おわりに	207

第Ⅱ部 狂言台本に関連する言語事象

第十章 「重宝」と「調法」

—— 狂言台本における使用状況とその語史 ——	211
一 はじめに	211
二 『狂言集成』と『狂言三百番集』における翻字の相違	213
三 他の狂言台本における状況	215
四 語史的考察	221
五 おわりに	231

第十一章 イソガシ・セハシ・アワタタシとその類語

—— 中世・近世における〈多忙〉〈性急〉を表す語の展開 ——	235
一 はじめに	235

二	〈多忙〉〈性急〉を表す語の使用状況	235
三	イソガシ・イソガハシ	236
四	セハシ・セハシナシ・セハセハシ	243
五	アワタタシ	250
六	おわりに	253
第十二章	狂言台本における謙讓語法	
	——「申サルル」とその周辺——	257
一	はじめに	257
二	いわゆる謙讓語、及びその関連についての分類	257
三	狂言台本における謙讓語・丁重語	258
四	「申サルル」「ルル」が尊敬語のものについて	259
五	「致サルル」「参ラルル」「存ゼラルル」などについて	265
六	おわりに	269
	引用・参照文献	273
	所収論文の掲載書籍・雑誌一覧(第四卷)	279
	本書所収の論文解説と未来への展望	281
	賢草日本語研究会より御礼のことば	298
	(その一) 小林 正行	289
	(その二) 荻宿 紀子	289

凡 例

- 1 研究書として刊行されたもの（「初版本」と称する）を根幹に、既発表論文を研究テーマごとに巻を分けて構成している。
- 2 初版本の論文体裁を尊重しており、編者の統一は、【注】表示のあり方など、ごくわずかである。
- 3 編者の統一を控えた理由は、三〇〜四〇年にわたる研究論文執筆において、論題や扱う資料によってその文体や表示面に変容が生じるのは自然の流れであると考えられるからである。また、機械的な統一によって、その論文本来のもつ「調和」をそこないたくなかったからでもある（ただし、数字の表記方法など最低限の統一については、読みやすさを考慮し、編集部のほうで手を加えた箇所がある）。
- 4 小林賢次は縦書き派であったので、横書き（横組み）で出版された一部の論考については、縦書きに直している。
- 5 引用・参考文献の挙げ方にも、古いものと新しいものとは変容が生じているが、初出、あるいは、初版本のままを反映している（ただし、編集部のほうで可能な限り形式の整理をおこなった）。
- 6 初版本に小林賢次自筆の書き入れがあるものについては、「小林賢次自筆書き入れより」という一項目を設けて、参考に供する。
- 7 初版本に誤植等、すでに小林賢次によって朱が入っているものは、6の扱いをせず、訂正された形を本文上に反映させている。

序章 狂言台本の研究とその刊行状況・本書の底本

本書は、日本語史研究の立場から、現存する各流各派の狂言台本を対象として、その資料性を明らかにし、古代語から近代語への変遷過程を考察する言語資料として位置づけけるとともに、狂言台本にみられるさまざまな言語事象を取り上げて分析・考察を行うものである。狂言台本の言語の研究を日本語史研究、特に古代語から近代語への変遷過程に位置づけるためには、従来から研究が進められてきている代表的な台本のみでなく、それぞれの流派における各種の台本を広く見渡した考察が必要である。この観点から、本書第Ⅰ部では、大藏流・和泉流・鷺流それぞれの台本のいくつかを取り上げて、その資料的性格を考察した。また、第Ⅱ部（編集部注…一部の章は『小林賢次著作集』第一・二・三巻に収録した）においては、狂言台本にみられるさまざまな言語事象を取り上げて、他の諸文献をも視野に入れながら、条件表現に関して、あるいは語彙・語史に関して具体的な考察を行った。すでに、前著『狂言台本を主資料とする中世語彙語法の研究』（勉誠出版、二〇〇〇）においても、狂言台本の資料性を考察するとともに、狂言台本を中心資料としての史的考察を行ったのであるが、本書は、その一層の発展を試みたものである。

狂言の歴史あるいはその台本の成立、狂言ことばの研究状況などに関しては前著に譲り、本書では省略する。次に、本書で資料とした狂言台本の底本等を示す。前著において、主な台本についての公刊状況を一覧にして示した。これは天理図書館善本叢書『鷺流狂言伝書保教本』（八木書店、一九八四）所載の田口和夫氏の「解題」（池田廣司（一九六七）に鷺流台本を加えて作成したものという。田口（一九九七）に一部訂正の上所収）をもとに「影印・翻刻・総索引・校注」の状況が一覧できるように筆者（小林）が補ったものである。その後、新たな刊行書が加わり、成立年などについて、一部訂正する必要も生じたので、新たな訂正を加えて再掲する。

〈表〉狂言台本の影印・翻刻等刊行状況

成 立 ・ 書 写 年			台 本 名	影印	翻刻	総索引	校注
中世	天正 6	1578	天正狂言本		○	○	○
近 世 前 期	慶長～寛永頃	1596 ～	祝本	○	○		
	寛永 19	1642	虎明本（大）	○	○	○	○
	寛永～正保頃	1645 前後	天理本（和）	○	○	○	○
	正保 3	1646	虎清本（大）	○	○	○	○
	万治 3	1660	狂言記	○	○	○	○
	延宝 6	1678	忠政本（鷺・仁）	○	○		
	承応 2～元禄 6	1653 ～ 93	和泉家古本（和）	△	○		
近 世 中 期	元禄 13	1700	狂言記外五十番	○	○	○	○
	元禄 13	1700	続狂言記	○	○	○	○
	享保 1～9 頃	1716 ～ 24	保教本（鷺・伝）	○	△		
	享保 15	1730	狂言記拾遺	○	○	○	○
	宝暦・明和頃	1751 ～ 72	伊藤源之丞本（大）		○		
	宝暦 11 頃	1761 ～	名女川本（鷺・伝）		○		
	安永 6	1777	森本（鷺・仁）		○		
	天明 6 頃	1786 ～	波形本（和）				
	天明 8～寛政 2	1788 ～ 90	有江本（鷺・仁）				
近 世 後 期 ～ 明 治	寛政 4	1792	虎寛本（大）		○		
	文化 1 頃	1804 ～	小杉本（鷺・仁）				
	文化 14	1817	虎光本（大）		○		
	文政年間	1818 ～ 30	雲形本（和）		*		
	天保 8～慶応 2	1837 ～ 66	三百番集本（和）		△		△
	嘉永 4 頃	1851 ～	常磐松文庫本（鷺・伝）		△		
	安政 2	1855	賢通本（鷺・仁）		△		△
	幕末～明治初年		山本東本（大）		△		△
	明治 43	1910	古典文庫本（和）	○			

大＝大蔵流 和＝和泉流 鷺・仁＝鷺流・仁右衛門系 鷺・伝＝鷺流・伝右衛門派
 ○……既刊 △……部分的刊行 *……別編・大本の翻刻

○前著ののち、祝本については、永井猛『狂言変遷考』（三弥井書店、二〇〇二）に影印が掲載されたので、表示を加える。

○天理本『狂言六義』については、東京都立大学中世語研究会編『狂言六義総索引』（勉誠出版、二〇〇五）が刊行されたので、表示を加える。

○和泉流の古典文庫本について、前著の〈表〉では、池田（一九六七）に従い、その親本の成立年代を天保十四年（二八四三）頃としているが、これは雲形本の記事の下限を示したもので、雲形本の執筆者、山脇和泉元業自身の筆録とみるべきものである。古典文庫本の親本の書写年次は不明とするしかない。ここでは、古典文庫本の底本が書写された明治四十三年（一九一〇）を、その年次として示すことにする。本書第五章参照。

○鷺流野中本については、野中儀右衛門は途中の段階での所有者に止まるかとされるので、常磐松文庫本と名称を改める。竹本幹夫「研究報告十七 常磐松文庫蔵『鷺流狂言伝書』一六四点」（実践女子大学文芸資料研究所『年報』第六号、一九八七）、及び、橋本朝生（一九九七）参照。

○三百番集本（南大路家旧蔵本）の項目を追加する。

以下、本書で資料とした狂言台本について、基本的には前著と同一であるが、底本等を示し、影印・翻刻や総索引の公刊状況などについて付記する。

〔流派の固定以前のもの〕

天正狂言本（天正六年（一五七八）奥書。一〇三曲）……内山弘『天正狂言本 本文・総索引・研究』（笠間書院、一九九八）による。ほかに、古川久編『狂言古本二種』（わんや書店、一九六四）、表章校注『狂言集（下）』（朝日古典全書、

一九五六、金井清光『天正狂言本全釈』（風間書房、一九八九）も刊行されている。

祝本（慶長）寛永頃書写。二三曲）……永井猛『狂言変遷考』（三弥井書店、二〇〇二）所収の翻刻及び影印による。

〔大蔵流〕

大蔵虎明本（寛永十九年（一六四二）大蔵流十三世大蔵虎明書写。本狂言二三七曲）……大蔵彌太郎編『大蔵家古本能狂言』

（全六冊、臨川書店、一九七六）の影印による。笹野堅編『古本能狂言集』（全五冊、岩波書店、一九四三、四四）の影

印もある。引用の用例には、臨川書店版のページ数を示した。岩波版とは相違がある。翻刻・校注として、池田廣

司・北原保雄『大蔵本狂言集の研究 本文篇（上・中・下）』（表現社、一九七二、八三）があり、これを底本とする北

原保雄他編『大蔵本狂言集総索引』（八冊、武蔵野書院、一九八二、八九）がある。ほかに、野村和世編『大蔵流狂言

古本『虎明本』（二）（七）』（國學院大學日本文化研究所紀要 二三、二九輯。一九六九、七二）の翻刻もある。また、

最近大塚光信編『大蔵能狂言集 翻刻 註解（上・下）』（清文堂出版、二〇〇六）が刊行された。筆者（小林）も翻刻本文

の作成や頭注の執筆に協力した。かくして基本文献としての利用の態勢がより整ってきている。本書では、第一章

で狂言台本の伝承と改訂、大蔵虎明の用語意識をめぐって考察し、第Ⅱ部における各論においても中心資料として

利用した。

大蔵虎清本（正保三年（一六四六）大蔵清虎書写、十二世大蔵虎清補訂。八曲）……古川久編『狂言古本二種』（わんや書

店、一九六四）の翻刻により、林田明編『虎清本狂言』（『近代語研究』第三集、武蔵野書院、一九七二）の影印を参照

する。ほかに、『国語国文学研究史大成 8 謡曲狂言』（三省堂、一九六一）に川瀬一馬校訂の翻刻（『椎園』第一輯、

一九三七）を転載し、松村明編・福島邦道補訂の総索引が掲載されている。

大蔵虎寛本（寛政四年（一七九二）十九世大蔵虎寛書写。一六五曲）……笹野堅校訂『大蔵能狂言（上・中・下）』（岩波文

庫、一九四二～四五）による。第Ⅱ部における各論において虎明本との比較の観点から資料として利用した。

伊藤源之丞本（宝磨・明和（一七五一～七二）頃伊藤源之丞吉高書写。一七冊、一七〇曲。大藏流八右衛門派台本）……永井猛・高橋修三校訂『宮島大藏流伊藤源之丞本（上・下）』（米子工業高等専門学校国語研究室、一九八八～八九）の翻刻による。

大藏虎光本（文化十四年（一八一七）大藏虎光原本書写。一五四曲。大藏流八右衛門派台本）……橋本朝生編『大藏虎光本狂言集（一～四）』（古典文庫、一九九〇～九二）の翻刻による。底本は、文政六年（一八二三）に山岸清斎が書写したものの。対校本との校異が示されている（詳細は、『小林賢次著作集』第三卷第八章参照）。なお、永井猛・高橋修三校訂『宮島本 大藏虎光狂言集』（米子工業高等専門学校国語研究室、一九九二）の本文をも参照する。

山本東本……小川弘志校注『狂言集（上・下）』（日本古典文学大系、岩波書店、一九六〇。一九四曲のうち、一一〇曲）の翻刻による。

なお、次に示す『狂言三百番集』において「大藏流八右衛門派（番外）」として翻刻されているものの底本とみられるものに、天理図書館蔵『狂言大外』（一〇冊、一〇〇曲（重複を含む））、『狂言新』（二冊、六曲）がある。本書第八章・第九章で取り上げる。

〔和泉流〕

天理本『狂言六義』（寛永・正保頃書写。二二七曲）……天理図書館善本叢書『狂言六義（上・下・抜書）』（八木書店、一九七五～七六）の影印による。北原保雄・小林賢次『狂言六義全注』（勉誠社、一九九二）の翻刻・校注、また、それを底本とする東京都立大学中世語研究会編『狂言六義総索引』（勉誠出版、二〇〇五）を利用する。この総索引の刊行も、狂言ことばの研究に有用なものとなるであろう。ほかに、北川忠彦・関屋俊彦・永井猛・田口和夫・橋本朝生・稲田

秀雄校注『天理本狂言六義（上・下）』（三弥井書店、一九九四・九五）があり、適宜利用する。「抜書」については、新日本古典文学大系『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』（岩波書店、一九九三。狂言歌謡は橋本朝生担当）にも翻刻されている。この天理本の筆録者をめぐる問題については、前著（小林（二〇〇〇）『小林賢次著作集』第三巻）、及び『小林賢次著作集』第五巻第十一章参照。本書第二章では、前著の発展として用語の考察を行った。

和泉家古本『六議』（承応二年（一六五三）→元禄六年（一六九三）山脇和泉家三代目元信道甫書写。二二二曲）……池田廣司解題・校注「和泉家古本『六議』（『日本庶民文化史料集成 第四巻狂言』三一書房、一九七五）の翻刻による。同書では区切り点に中央の黒丸を用いているが、用例の引用にあたり、通常の読点に改める。なお、「抜書」に関しては池田廣司（一九六七）に掲載の影印による。

波形本（天明六年（一七八六）頃早川幸八書写。一六冊、二五四曲）……原本の写真による。

雲形本（文政年間頃山脇和泉家七代目元業^{もしや}道鮮書写。二〇冊二〇〇曲）……原本の写真による。本書第四章・第五章で考察の対象とした。雲形本には別編のもの、大本等もあり、「別編」の曲は、雲形本研究会「雲形本・別編『狂言六義（一）（二）』（『武蔵野女子大学能楽資料センター紀要』第九号（一九九八）、一〇号（一九九九））に、同じく「大本」は第一号（二〇〇〇）に翻刻されている。

なお、この雲形本に先行するものとして、五代目山脇和泉元喬（道味）の書写本（端本一冊、一四曲）が翻刻されている。雲形本研究会「翻刻 和泉流狂言『六儀』元喬本（上・下）」（同上、第一三三号（二〇〇二）、第一四号（二〇〇三））。本書第四章で取り上げる。

また、波形本と雲形本との中間に位置するものとして、和泉流秘書（一冊欠き六冊、一二七曲。愛知県立大学附属図書館蔵）があり、その一部が島津忠夫・野崎典子編『和泉流狂言選^{愛知県立大学附属図書館蔵}』（和泉書院、一九八〇）等に影印され、小谷成子・野崎典子両氏による翻刻が、『愛知県立大学文学部論集』に継続掲載されている。

古典文庫本（明治四十二年書写。二〇冊、二〇〇曲）……吉田幸一編『和泉流狂言集（一～二十）』（古典文庫、一九五三）六二）の影印による。本書は奥書によると、名古屋の和泉流の何某所蔵の秘本を清団子の囑託により、明治四十三年に如醉吉見明が書写したものであるという。雲形本の写しとされるが、古典文庫本の本文は、誤写・誤脱等が多いほか、ト書き・注記に関しては、詳細な内容を要約して簡略にするなど、意図的な書き換えも多く、注意が必要である。本書第五章で考察の対象とした。なお、「清団子」について、吉田幸一氏の「解説」（第一冊、一七ページ）では、和泉流狂言師小早川精太郎であるとする。これにより、小早川本と呼ばれることがあるが、確証はなく、『狂言辞典 資料編』（古川久・小林貢編）では、「清団子は「清団」という狂言上演団体を主宰した山下迂作こと久保扶桑ではないか」（二一ページ）と推定している（同書に「清団」「山下迂作」の項目があり、それによると、小早川精太郎は山下迂作の師の一人である）。従うべきであろう。

三百番集本……和泉流三宅派の台本。野々村戒三・安藤常次郎校註『狂言三百番集（上・下）』（富山房百科文庫、一九三八～四二）の翻刻による。同書は三宅庄市（一八二四～一八八五）手沢本を主とし、これに和泉流の番外曲のほか、大蔵流・鷲流の番外曲等を加えたもの。野々村・安藤両氏の『狂言集成』（春陽堂、一九三一。復刻版、能楽書林、一九七四）と本狂言の底本は共通のはずであるが、両者の翻刻本文には表記上その他かなりの異同がある。問題点に関しては、法政大学能楽研究所所蔵の南大路家旧蔵台本によって確認した。特に本書第六章で考察の対象とし、第七章及び第十一章・『小林賢次著作集』第二巻第三章の調査は、和泉流の曲に限って対象とした。

なお、本書第六章で使用した山脇和泉元照編『和泉流狂言大成（全四巻）』（二〇〇曲。わんや江島伊兵衛刊、一九一六～一九）及び、野村萬斎編『新撰狂言集（第一輯・第二輯）』（二〇〇曲。わんや書店、一九二九～三〇）も、同じく和泉流三宅派の台本である。

〔鷺流〕

延宝忠政本（延宝六年（一六七八）忠政書写、一冊、二五曲（宗家仁右衛門系）……田口和夫「鷺流狂言『延宝・忠政本』翻刻・解説」（『静岡英和女学院短期大学紀要』第一号、一九七九）による。田口（一九九七）所収の影印を参照する。

享保保教本（享保年間（一七一六～二四）鷺保教他書写。本狂言一五〇曲（分家伝右衛門派）……天理図書館善本叢書

『鷺流狂言伝書^{保教本}（一～四）』（八木書店、一九八四）の影印による。特に本書第三章で考察の対象とし、齋藤香村

校訂『謡曲文庫 狂言篇（上）』（謡曲文庫刊行会、一九二八）の翻刻の状況も考察の対象とした。

宝暦名女川本（宝暦十一年（一七六一）頃名女川辰三郎書写。一二〇曲（伝右衛門派）……北川忠彦・関屋俊彦「翻刻

鷺流狂言『宝暦名女川本』（二～六）」（『女子大國文』第一〇五～一一号、一九八九～九一）による。本書第三章の考

察などで関連資料として利用した。

安政賢通本（安政二年（一八五五）鷺賢通書写。一九二曲（仁右衛門系）……野々村戒三解説・古川久校註『狂言集

（上・中・下）』（日本古典全書、朝日新聞社、一九五三～五六）の翻刻による。本書第三章の考察などで関連資料とし

て利用した。

なお、今回本書では特に資料として利用しなかったが、山口に伝わる鷺流狂言を集大成したものとして、鷺流狂言記録作成委員会編『山口鷺流狂言資料集』（全三冊。山口市教育委員会、二〇〇一）がある。

〔版本狂言記〕

『狂言記（正篇）』万治三年（一六六〇）初版……北原保雄・大倉浩『狂言記の研究（上）影印篇、（下）翻字篇・索引篇』（勉誠社、一九八三。底本、学習院大学国語国文学研究室蔵寛文二年安田版）

『狂言記^{外五十番}』元禄十三年（一七〇〇）刊……北原保雄・大倉浩『狂言記外五十番の研究』（勉誠社、一九九七。底本、

京都大学文学部蔵本。解説篇に「『狂言記』 関係研究文献目録」を収める。

『続狂言記』元禄十三年（一七〇〇）刊……北原保雄・小林賢次『続狂言記の研究』（勉誠社、一九八五。底本、筑波大学附属図書館蔵本）

『狂言記拾遺』享保十五年（一七三〇）刊……北原保雄・吉見孝夫『狂言記拾遺の研究』（勉誠社、一九八七。底本、早稲田大学附属演劇博物館蔵本）

以上の影印・翻刻による（各五〇曲）。本書では、特に第七章で、三百番集本と比較して版本狂言記の状況を示し、第Ⅱ部の各論でも、資料として利用した。勉誠社のシリーズは影印・翻刻本文のほかに総索引を備え、解説篇（言語資料としての解説を含む）を添えたものである。また、新日本古典文学大系『狂言記』（岩波書店、一九九六。橋本朝生・土井洋一校注）に、『狂言記（正篇）』と『狂言記外五十番』については校注を付し、『続狂言記』と『狂言記拾遺』については付録として本文の翻刻が収められている。『狂言記（正篇）』の寛文五年版（一曲のみの抄出本）については、北川忠彦・和田克司『寛文五年版『狂言記』（『室町ごころ——中世文学資料集』）角川書店、一九七八）の翻刻もある。

〔用例の引用にあたって〕

- 1 次章以下、用例の引用にあたって、特に表記等を問題とする場合を除いて、漢字は原則として現行通行の字体を用いる。ただし、一部の異体字の類はそのまま用いる場合がある。
- 2 台本・翻刻本によって表記がさまざまであるため、曲名の表記を含めて、適宜変更を加えた。振り仮名の多い台本の場合、一部を省略することがある。
- 3 引用文の一部を省略する場合、省略箇所が長い場合には「…（略）…」のように示すが、比較的短文の場合「……」で示すこともある。